

特279-253



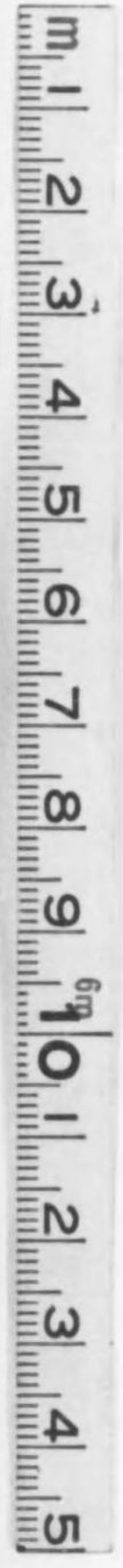
1200501132162

279

253

電信沿革略史

国立国会図書館



始



シセA4

電信沿革略史

明治三十五年七月

逓信省電務局



緒言

電氣作用ハ數世以前既ニ人ノ知ル所トナレリト雖
 之ヲ通信ノ實用ニ供シタルハ西曆千八百三十七年
 ニ創マレリ其自テ來ル未タ遠カラス爾來極テ迅速
 ニ發達シ明治二年本邦ニ傳來セシ時ニ方リテヤ既
 ニ殆ト歐米全般ニ普及スルニ至レリ而テ本邦ニ在
 リテモ二十又三年ノ成績ヲ回顧スレハ或ハ一頓ノ
 時期ナキニアラスト雖之ヲ概括通觀スルトキハ其
 進歩ノ速ナル亦驚クニ堪ユルモノアリ



夫通信ノ用タル小ハ以テ隣保相親ムヘク大ハ以テ
萬國相交ルヘク由リテ智識ヲ交換シ由リテ信義
ヲ保有シ又由リテ有無相賀フル所以ニシテ其方法
妙カラスト雖電信ハ實ニ其至便至速ノ利器ニシテ
方今陸ニ汽車アリ海ニ汽船アリ何ノ邦國ヲ問ハス
何ノ人種ヲ論セズ百般ノ通信益敏速快駛ヲ競フノ
時ニ於テ千萬里外ニ在リテ速ニ相報答セント欲ス
蓋此利器ニ頼ルニアラスシテ焉ソ其意望ヲ達スル
ヲ得ンヤ此ニ由リテ之ヲ觀レハ此長足ノ進歩ヲ為

ス洵ニ偶然ニアラス而テ今後又文化ノ度愈進ムニ
從ヒ利益増加シ事業益擴張スヘキハ復タ疑ヲ容
レサル所ナリ此業前途真ニ多望ナリト謂フヘシ
嗚呼事ニ此ニ從フ者豈専心一意其擴張整備ヲ努メ
以テ軍國ノ務商工ノ業及百般迅速通信ノ利便ヲ完
クセンコトヲ計ラサルヘケンヤ之ヲ努メ之ヲ計ル
須ク先ツ既往ノ沿革ヲ知り而後現今ノ實況ヲ視以
テ將來ノ得失ヲ判スヘシ然リ而テ本邦電信事業モ
亦創設以降既ニ二十又餘歳ヲ経其沿革尠シトセス

浩瀚ノ簿冊ニ就テ之ヲ考索スルハ寔ニ艱シ是ニ於
テカ本書ヲ編纂シ之ヲ梓ニ上シ以テ沿革ノ梗概ヲ
察知スルノ便ニ供ス其局ニ當ル者及本邦電信事業
ノ良否得喪ヲ論究セントスル者此書ヲ繙キ其沿革
ヲ概知セハ其レ或ハ益スル所アルニ庶幾カラシ敷
若シ夫レ詳細ノ事項ハ帝國大日本電信沿革史ニ具
ス

明治二十五年七月

逋信省電務局長若宮正音識

例言

- 一 本書ハ帝國大日本電信沿革史中ノ大綱ヲ摘採シ
年次ニ依リ之ヲ列敘スルモノニシテ明治二年ニ
起リ明治二十四年ニ至ル
- 一 本書ハ梗概ヲ示スニ止マルモノナレハ年ヲ異ニ
シ月ヲ代ル毎ニ其行ヲ改メ其項ヲ分タス是レ之
ヲ分載スルトキハ却テ繁雜ニ涉ルノ嫌アレハナ
リ
- 一 電信電話局所數及其線路延長ハ明治二十四年十
二月末日現在ノモノヲ第三編ニ掲出シ其開廢變
更等ノ沿革ハ之ヲ省ク
- 一 電信ニ関スル沿革ノ狀況ヲ通觀スルニ便セン為
卷末ニ各種ノ比較表ヲ掲載セリ

明治二十五年七月

編者

逋信屬前田銀次郎記

總論 目次

第一編	官制	一頁
第一章	中央	七
第二章	地方	一三
第二編	制度	
第一章	電報	一九
第二章	料金	二三
第三章	建築	二八
第四章	私設電機	三一
第三編	事業	
第一章	電信	三五
第二章	電話	四〇

第四編	技術	四三頁
第一章	修技
第二章	製機	五一
第五編	理財	五三
第六編	海外電信
第一章	萬國聯合	五七
第二章	大北部電信會社	六一
電信比較表		

總論

本邦電信ノ事業タル實ニ明治元年廟議ニ上リ乃今其議定ノ趣旨ニ基キ技師ヲ英國ニ徵庸シ同ニ年始メテ東京横濱間ニ線路ヲ布設シ通信ヲ開キタルヲ濫觴トス爾後局ニ當ル者專ラ線路ノ延長増架ヲ計ルト雖モ當時文化ノ進路猶ホ低ク之ヲ利用スル者甚ク寡ク動モスレハ輒チ却テ此學ヲ妨碍シ以テ事業ノ進歩ヲ阻害セントスル者アリ而テ其通信ノ如キモ技術ノ練習ヲ旨トシ傍ラ公私ノ使用ニ供スルニ過キサルヲ以テ業務素ヨリ未夕整ハサリシカ同六年電信取扱規則ヲ設ケテ通信ノ方法順序ヲ示シ同七年電信條例ヲ定メテ電信犯罪ノ罰例ヲ明ニスル等制度ノ基礎稍定リタリ

同十年西南ノ役起ルニ及ヒテ國事上大ニ必要ノ度
ヲ進メ以テ其工程ヲ助ケ為ニ九州幹線ノ連環四國
線ノ新設ヲ見ルニ至レリ
同十一年ニ至リ本邦電信開業式ヲ舉行シ各電信局
ヲ公開シテ内外通信ノ送受ヲ執行セシメ翌十二年
萬國電信聯合條約ニ加盟シ始メテ海外諸國電信局
ト其資格ヲ同クシ相對峙スルコトヲ得タリ是レ洵
ニ本邦電信事業ノ一大進歩ト謂フヘシ
既而公衆漸次其利便ヲ知り電信局ノ増設ヲ希望ス
ル者少カラス是ニ於テ同十四年地方人民ノ電信興
業費及其局舎ヲ獻納スルコトヲ許容スルノ途ヲ開
キシヲ以テ之ヲ獻納シテ置局ヲ請願スル者多ク仍
テ其地ノ實況ヲ考查シ果シテ必要アリト認ムルモ

ノニ就キ經費支持ノ程度ヲ計量シテ之ヲ許可シ順
次建設シ漸ク其線路ヲ延長シタリ
同十七、八年ノ交ニ至リ其幹線殆ト全國五畿八道ニ
達セリ此時ニ當リテ交通ノ道大ニ開ケ人文進歩シ
通信ノ數益増加シ送受頗ル頻繁音信各線ニ輻湊ス
乃チ其方向ヲ守成ニ轉シ既設線路ニ線條ヲ添架シ
又電信條例電信取扱規則ヲ改正シテ其權利義務ヲ
規定シ方法順序ヲ明晰ニシ大ニ制度ノ完備事業ノ
整理ヲ謀レリ而テ此時ニ方リ從來ノ各地不同料金
ヲ改メ全國均一料金ノ制ヲ立テシハ實ニ本邦電信
事業上最大進歩ナリト謂フヘシ
其後屢々官制ノ變更組織ノ改定等アリト雖多クハ
是レ行政事務ノ整理ヲ勉メ制度ノ美ヲ計ルニ止リ

事業ノ擴張實務ノ整備ニ至テハ却テ少シク緩漫ニ
流レタルノ傾向ナキニアラス
同二十一年三等電信局ノ制ヲ改メ經費請負ノ法ヲ
設ケ其便ニ頼リテ以テ置局ノ數ヲ増加セシコトヲ
勉メ曩ノ獻納許可ノ制ト相待テ以テ事業ノ擴張
ヲ助クルノ道ヲ開キタリ是レ亦本邦電信事業沿革
上記憶スヘキノ一タリ其他鐵道專用ノ電線ヲ公衆
ノ通信ニ供用セシムルノ制ヲ設ケタルモ亦其利便
ヲ増進シタルノ一端トス
國防行政拓地殖民商工業及一般人事上電信事業擴
張ノ必要日ニ月ニ増加スルヲ以テ同二十三年以降
復タ其方針ヲ事業ノ擴張ニ向ケ兼テ業務ノ整備ヲ
計リ進テ線路ヲ延長増加シ大ニ電信局ヲ増設シ又

且ツ其速達正確ヲ勉メタリ即チ同年ニ於テ津輕海
峽及中國四國間ニ海底線ヲ増設シ東京及横濱ニ電
話交換ヲ創設シ同二十四年ニ於テ本州佐渡間及北
海道噴火灣ニ海底線ヲ新設シ又呼子嚴原間布設ノ
大北部電信會社海底線ヲ買收シタルカ如キハ其最
モ重且大ナルモノトス
以上敘述スル所ハ本邦電信事業沿革ノ大綱タリ若
シ夫レ官制制度事業技術理財海外電信等ノ沿革ハ
更ニ編ヲ分テ之ヲ敘述ス

第一編 官制

第一章 中央

夫レ事業ノ發達整備ハ主トシテ之ヲ運轉スル機關ノ組織其宜キヲ得ルニ由ル故ニ官制ノ良否得失ハ大ニ其事業ノ消長ニ關係スルヲ以テ今電信事業ノ發達整備セシム所以ヲ知ラント欲セハ先ツ之ニ關スル官制ノ沿革ヲ明カニセサル可ラス抑モ電信ノ業務タル創設ノ際ハ或ハ外務省ニ屬シ又民政部大藏省及民部省ニ隸シ漸ク其基礎ヲナスノ地ヲ經始スルニ似タリト雖ホ未タ獨立ノ主管廳ナク隨ヒテ專任ノ官吏ヲ置カス全ク燈臺事務ニ付屬シテ臨機ノ處理ニ一任シ又或ハ政府直ニ之ヲ處分シ或ハ府縣ヲシテ之ヲ擔掌セシメ更ニ輕重ノ別ナキモノノ如シ

明治三年ニ至リ民部省中初メテ電信機掛ヲ置クモ土
木司中ノ一掛ニシテ其實際ハ猶ホ燈明名掛ニ於テ
之ヲ處理シタルトキト逕庭アルコトナシ
同三年ノ末工部省ヲ置キ之ニ屬シ同四年八月ニ至
リ工部省官制ヲ制定シ電信寮ヲ創立シテ二等ニ班
シ頭、權頭、助、權助等專任ノ官ヲ置キ寮務ヲ七課ニ分
掌シ助、權助等各課長ノ職ニ當ル是ニ至リテ始メテ
其統屬スル所ヲ確立シ事務整理ノ基ヲ開ケリ之ヲ
電信ニ関スル官制ノ一大基礎トス
同五年六月電信寮分掌規程ヲ設ケ各課ノ分掌スヘ
キ事項ヲ明ニシ同六年四月分課ヲ改定シ漸ク改良
ノ實ヲ顯ハセリ其十二月本寮出張所ヲ大阪ニ置ク
是レ電信ノ線路日ヲ趁フテ各地ニ伸張スルニ隨ヒ

中央一所ニ於テ之ヲ統率スルヲ以テ不便ナリトシ
タルニ由レリ
同十年一月各省ノ諸寮ヲ廢シ其管掌事務ハ各省長
官ノ意見ヲ以テ適宜局ヲ設クルノ制ヲ立テタルニ
際シ本寮及大阪出張所ヲ廢シ更ニ電信局ヲ置ク是
レ曩ノ寮ニ比スレハ少シク其地位ヲ低下シタルニ
似タリト雖局長ノ職ハ高等奏任官之ニ當リ敢テ新
舊大差アルナク只其課ヲ以テ掛トナシ其係長ハ判
任官ヲ以テ之ニ充用スルノ小異アルノミ
同十八年十二月ニ至リ工部省ヲ廢シ逓信省ヲ置ク
ニ當リ隨テ其所管ニ屬ス而シテ其局ハ依然舊地ニ
在リテ其分科モ亦舊ニ依レリ
同十九年二月逓信省官制ヲ定メ猶電信局ヲ置キ局

中ヲ二部ニ分テ更ニ其部ヲ數課ニ細別シテ事務ヲ
分掌セシム又其三月地方通信官制ヲ制定シ須要
ノ地ニ通信管理局ヲ置キ郵便及電信ノ事務ヲ監督
セシム而シテ全國ヲ分テ十五管理區トナシ局ノ名
稱位置及管轄區域ヲ定メ而シテ電信局ト管理局ハ
略ホ同等ノ地位ヲ保テ内外相應シテ以テ電信分局
ノ事務ヲ監督ス
同二十年三月通信省官制ヲ改正シ電信局ヲ廢シ其
事務ハ郵便ト合併シ事業ノ經理ヲ内信局ニ外國電
信ヲ外信局ニ分屬シ別ニ總務局ニ審査課ヲ置キ郵
便犯罪ト共ニ電信犯罪ノ審査ヲ掌ラシメ會計局ニ
收支課及倉庫課ヲ置キ郵便電信ノ收入及電信貯藏
物品ニ関スル事ヲ掌ラシメ而テ電信ノ工業ハ專ラ

工務局ノ掌理スル所トナス復夕之ヲ以テ電信ニ関
スル官制ノ一大變革トス
爾後通信管理局ハ之ヲ閉鎖又ハ合併スルモ少シ
トセズ遂ニ同二十二年七月ニ至リ地方通信官制
ヲ廢シ更ニ郵便及電信局官制ヲ制定シテ通信管理
局ヲ全廢シ一等郵便及電信局ヲ地方官廳所在地ニ
置キ（奈良、滋賀、埼玉、佐賀、四縣ニ限リ之ヲ置ク）
一等局擔任條件ヲ定メ其區内各局所ニ對シ通信事
務上監督スヘキ條件ノ範圍ヲ明ニシ又本省内事務
ノ分掌ヲ釐革セント欲シ先ツ各局擔任區分内規ヲ
設ケ試ミ之ヲ實行シテ以テ其當否ヲトシ一年ノ
實驗ヲ經其適當ナルヲ確知シ同二十三年六月之ニ
基キ通信省官制ヲ改定シ内信、外信、工務ノ三局ヲ廢

シテ郵務局、電務局ヲ置キ局務ヲ三課ニ分掌セシメ
電信ニ関スル事務ハ舉ケテ電務局ノ掌理スル所ト
ナシ唯其電信用品製作ニ関スル事項ノミ之ヲ大臣
官房ニ於テ掌理スルコトナセリ是亦電信ニ関ス
ル官制ノ一大變革タリト雖要スルニ二十年三月改
正以前ノ制ニ復舊シ電信ニ関スル一切ノ事務ヲ一
局ニ綜合掌理セシメタルモノナリ
同二十四年七月ニ至リ又逋信省官制ヲ改定シ新ニ
電氣事業監督ノ事ヲ加ヘ電務局ノ掌理スル所トナ
セリ是レ輓近該事業漸ク發達シ監督ヲ忽ニス可ラ
サルニ由ル又電務局ノ三課ヲ廢シ更ニ通信課、工務
課及電氣試驗所、電報調査所ヲ置キ局務ヲ分掌セシ
ムルコトトナシタリ

第二章

地方

電信ノ實業ヲ執行スル官衙ハ明治二年之ヲ傳信機
役所ト稱シ其十二月ニ至リ之ヲ傳信局ト改メ同五
年更ニ之ヲ電信局トス同六年五月各局事務ノ繁簡ニ
由リ經費ニ等差アルヲ以テ等級ヲ設ケ之ヲ三等ニ
分テリ同十年一月電信寮ヲ廢シ電信局ヲ置クニ及
ヒテ之ヲ電信分局ト稱シ以テ相混セサラシム同十
一年三月東京ニ電信中央局ヲ設ケテ全國電信ノ中
心トシ同十三年十二月各分局收入金額ノ多寡ニ應
ジ更ニ局ノ等級ヲ改定ス同十五年一月ニ至リ各分
局ノ等級ヲ定ムルニ收入金ノ多寡ニ由ルノ制ヲ廢
シ通信數ノ多寡ニ由ルモノトス同十六年十一月大
阪梅田電信分局ヲ西部電信中央局トナシ各線ヲ茲

ニ湊合シ以テ大阪以西各分局ニ發着スル音信ノ継
送ヲ掌ラシム同十九年三月地方通信官官制ノ制定
ニ伴ヒ一等局ノ地位ヲ高メ其ノ局長ヲ奏任トナシ
三府五港ニ限り之ヲ置キ九月蒲官廳ニ設クル所ノ
電信分局ヲ電信取扱所ト改稱ス是ヨリ先キ公衆ノ
通信ヲ送受スルト否トニ拘ハラズ電信ヲ取扱フ所
ハ總テ電信分局ト稱シ東京大阪市街ニ在ル警察用
電信局及停車場ニ設クル鐵道用電信局ノ如キ時ニ
或ハ公衆ノ通信ヲ送受シ又或ハ之ヲ廢停シテ單ニ
鐵道用警察用ノミニ供スル等一見之ヲ辨シ難カリ
シカ是ニ至リテ稍々之ヲ判別スルニ易カラシム其
十一月通信ノ業務ヲ合同整理セシムル為郵便及電
信ノ西局ヲ合併シテ郵便電信局トナスノ制ヲ立ツ

同二十年三月通信省官制ノ改正ニ依リ電信分局ヲ
電信局ト改稱シ其五月東京大阪京都横濱及神戸ニ
在ル各電信局中本局トナルモノヲ除キ自餘ノ局ヲ
其支局トナス同二十一年六月三等電信局ヲ悉ク二
等ニ改定ス又三等電信局經費給與規則ヲ規定シ經
費請負ノ法ヲ開キ其局長ハ俸給ヲ給セス手當ヲ給
シ通信大臣特ニ定ムル採用規則ニ據リ之ヲ送任ス
ルコトトナス其十一月鐵道所屬ノ電線ヲ使用シ公
衆ノ通信ヲナスノ制ヲ立ツルニ當リ此法ニ據リ鐵
道停車場ニ開クモノモ亦電信取扱所ト稱ス同二十
二年七月地方通信官官制ヲ廢シ郵便及電信局官制
ノ制定アルニ依リ全國內ニ四十四箇所ノ一等郵便
電信局ヲ置キ内三府五港及名古屋熊本仙臺廣島ノ

十二局ニ在リテハ其局長ヲ奏任トシ又特ニ東京大
阪兩局ニ奏任ノ事務官各二人ヲ置キ郵便電信ノ事
務ヲ分掌セシム同二十四年七月郵便及電信局官制
ヲ改定シ東京大阪兩局ノ事務官ヲ各一人トシ別ニ
技師一人ヲ置キ技師ヲシテ專ラ電信ノ業務ヲ掌理
セシムルコトトナセリ是ヨリ先キ大ニ郵便電信ノ
兩局ヲ合併シ餘ス所ノ電信局ハ僅ニ二等局ニ止リ
是レ亦爾後漸次合併シ又新ニ電信事業ヲ開始シテ
之ヲ所在ニ三等郵便局ニ合スルモノ陸續相繼キ益々
地方通信業務合同整理ノ實ヲ顯ハセリ
電信建築ノ業務ヲ執行スル官衙ハ創業ノ際ニ在リ
テハ別ニ之ヲ置カス建築官ハ電信寮ノ管轄ニ屬シ
各地ニ分派シテ其業務ヲ執行ス明治九年三月ニ至

リ線路修築出張員ノ受持區域及其本居地ヲ定ム之
ヲ電信建築區ヲ規定シタルノ創始トス爾後線路ノ
増加スルニ從ヒ其區域ヲ改正スルコト數次同十九
年八月電信建築官官制ヲ定メ大ニ其職務權限責任
等ヲ明ニシタリ同二十年十二月電信建築技術官章程
ヲ定ム是ニ至リテ建築官ハ通信管理局長ノ管理ニ
屬シ各管理局ニ電信建築長及電信建築手ヲ置キ技
術官ヲ以テ之ニ充テ管理局長ノ指揮監督ヲ受ケシ
ム同二十二年七月電信建築官章程ヲ改定シ工務局
ノ管掌ニ歸シ其建築長ハ該局長ノ指揮命令ヲ承ケ
シメ而シテ其建築區ヲ九區五十二部ニ分割シテ各
其業務ニ服セシム是レ官制ノ改正ニ依リ通信管理
局ヲ廢止シタルニ由ル同二十四年四月建築區劃ヲ

改メテ七區四十七部ト為ス七月ニ至リ始メテ電信
建築署官制ヲ定メ（其區劃ハ都テ此年四月ノ改定
ニ依ル）東京、大阪、札幌、仙台、名古屋、廣島、熊本ノ七署
ヲ設ケ全國ヲ分割セシメ各署ニ技師、書記及技手ヲ
置キ技師ハ電信建築署長トナリ署中全部ノ事務ヲ
掌理スルコトトナリ其制茲ニ於テ確立シタリ
電話交換ノ實業ヲ執行スル官衙ハ之ヲ電話交換局
ト稱シ明治二十三年十二月始メテ之ヲ東京及横濱
ニ置ク是ヨリ先キ同年十一月電話交換局事務章程
ヲ規程シ其職員ヲ分テ主管、電話技手、電話書記トス
同二十四年七月電話交換局官制ヲ定メ電話交換局
ニ技師、書記、技手ヲ置キ技師ハ其局長トナリ局中全
部ノ事務ヲ掌理スルコトトナリ其制茲ニ於テ確立
シタリ

第二編

第一章

電報

電報ハ創業ノ際ヨリ和文、歐文ノ區別ヲ立テ明治二
年十二月東京横濱間ニ於ケル和文電報ノ書法、配達
及隱語等ノ規定ヲ設ケ同三年四月其歐文ニ関スル
モノヲ定メ爾後一線路ヲ開ク毎ニ同一ノ方法ニ依
リ必ス之ヲ布令ス同六年五月同文電報ノ方法ヲ創
メ六月郵船配達ノ便ヲ開キ八月電信取扱規則ノ制
定ニ方リテ電報語字及符號ノ計算並郵便配達電報
書留電報、通信料前納電報、照枝電報、校正電報、符號電
報ノ種別ヲ明ニシ十二月電信符號取扱規則ヲ定メ
同七年十月延着ノ電報ニ其理由ヲ記入スルノ方法
ヲ創メ又往所氏名ハ必ス假名ヲ以テ記載シ句讀ヲ

矣セシム同八年十一月郵便頼信ノ法ヲ開キ同九年
一月局待電報ノ指定ヲ字数ニ算入スルコトトナシ
三月追尾電報ノ制ヲ設ケテ電報ノ追尾傳送スルコ
トヲ得セシム同十一年三月住所氏名ノ字数ヲ信文
ニ通算スルコトトナス依リテ略名料額ヲ定メ契約
ノ上之ヲ用フルコトヲ許ス其十一月又之ヲ廢シ住
所氏名ハ字数ノ多寡ニ係ハラス一定ノ料金ヲ徴ス
ルコトトナシ同十二年五月電信取扱規則ノ改正ニ
依リ官報局報私報ノ別及其傳送順序ヲ明ニシ至急
電報受信報知電報及連名電報等ノ法ヲ創定ス殊ニ
其官報局報私報ノ種別及其傳送ノ順序等ハ從來慣
例又ハ取扱者心得等ニ據リ之ヲ分別處理シ來リシ
モ此改正ニ依リ始メテ之ヲ規則ノ明文ニ掲ケテ確
ニ

定スルニ至レリ七月歐文符號電報ニシテ文字ト数
字トヲ混用スルモノノ字数計算方法ヲ定メ又和歐
文ノ別ナク總テ電報ヲ受信スルトキハ炭酸紙ヲ用
ヒテ之ヲ騰寫スルノ制ヲ立ツ同十五年六月島嶼配
達ノ法ヲ創ム同十八年四月電信條例並電信取扱規
則ノ改定ニ原キ整革スル所歟ナカラス其最モ著シ
キモノハ電信切手ヲ發行シ往所氏名料ヲ廢シ受取
證書ヲ出スノ法ヲ設ケ尋問改正ノ手續ヲ明ニシ閱
覽正寫ノ法ヲ創ムル等トス尋テ電信局内心得書及
同附則ヲ定メ電報受付配達ノ方法順序及其檢査並
整理手續等ヲ明ニシ九月郵便爲替ヲ電信ニ依リ報
知アルノ法ヲ開ク同二十一年三月電報檢査手續ヲ
改定シ電報ノ不達又ハ紛失ヲ豫防スルヲ勉ム又電

報郵送手續ヲ定メ既而其七月之ヲ改正シ十一月鉄
道電信取扱所ニ於テ配達スル電報ハ留置トナシ又
郵便配達トナスコトトス同十二年二月鉄道電信
取扱所ニ於テ區域ヲ限リ其電報ヲ配達シ又ハ別使
配達及解船配達ヲナシムルコトアリト定ム同二
十三年八月電報局渡規則ヲ設ケ受信人ヲシテ電報
ノ配達ヲ待タス著信局ニ付速ニ之ヲ受領スルコト
ヲ得セシム十一月電報配達人ニ電報ノ差出方ヲ依
托スルヲ得ルノ便法ヲ開ク同二十四年一月電報ノ
送受上粗漏ノ取扱ナカラシメンカ為メ電報原書査
閲手續ヲ定メ七月返信料前納電報取扱規程ヲ改正
シ證書ヲ以テ返信料ヲ交付スルコトトナセリ此他
電報ノ秘密ヲ保護シ及其速達正確ヲ計ル為メ方法

ヲ規定シ或ハ訓達ヲ發シタルコト鮮カナラスト雖
今煩ヲ避ケテ之ヲ省キ本章ニハ單ニ電報ノ取扱方
法ニ関スル沿革ノ大要ヲ略敘セリ

第二章 料金

電報料金ハ明治二年十二月東京横浜間ニ於テ公私
ノ通信ヲ開始スルニ當リ和文電報料額ヲ定メ同三
年四月同所間歐文電報料額ヲ定メ相繼キテ大阪神
戸間ノ料金ヲ定ムル等線路架設ノ工ヲ竣ヘ置局ス
ル毎ニ其料額ヲ定ム同四年五月官用傳信機稅則ヲ
設ケ始メテ官用電報モ亦私報ト同ク其料金ヲ徵收
スルコトトシ局報ニ至リテハ猶ホ無料之ヲ送受セ
リ是レ蓋シ萬國一船ノ公定ニ基ケルナリ同五年七

月海外電報國內傳送料額ヲ定メ九月東京府内ノ音
信料額ヲ特定ス同六年五月同文電報ノ制ヲ創メ夕
ルヲ以テ其料額ヲ定ム六月横濱神戸長崎ノ港内ニ
碇泊スル船舶ニ配達スル手数料ヲ定メ發信人ヨリ
前納セシム八月電信取扱規則ノ制定ニ依リ電報ノ
料金ハ音信數ニ依リ其額ヲ計算シ都テ發信人ヲシ
テ之ヲ前納セシメ傳送上ノ誤謬ニ出タルコト明白
ナルモノノ外ハ之ヲ還付セサルコトトシ郵便配達
電報ハ其電報料ノ郵便稅ヲ納メシメ又返信料前
納電報ノ前納料額ハ原信ノ三倍以内ニ限ルコトト
シ書留及符徵電報料ハ通常音信料ノ二倍ヲ課シ照
校電報ニ對スル料金ハ之ヲ假納セシメ其誤謬電送
上ノ過失ニ出ルトキハ之ヲ返付シ受信電報料ハ一

音信料トシ同文電報料ハ從前ト其額ヲ同フシ且宛
所ノ誤謬ニ依リ到達セサル電報ハ更ニ其料金ヲ徵
シテ之ヲ傳送シ既ニ領收シタル料金ノ誤謬ハ之ヲ
更正スルコトヲ得セシム其十月海外電報國內傳送
料額ヲ改定ス同七年二月符徵電報ノ照校料ヲ該電
報料額ノ半トス同八年十一月電信局ナキ地ヨリ發
スル電報ハ郵便切手ヲ以テ料金ニ充テ合封シテ郵
便ニ付シ差出スノ便ヲ開キ同九年三月追尾電報ノ
制ヲ設ケ其追尾ニ係ル料金ハ受信人ヨリ徵收スル
コトトス其七月一人ヨリ發シ一家數人ニ宛テ夕
ル異文電報ノ配達料ハ其一通ヨリ特使料又ハ別配
達料ヲ徵シ其餘ハ通常届賃ニ止メ又海外音信料取
扱心得書ヲ設ケ各局取扱ノ手續ヲ一定ナラシム同

十一年二月海外電報國內傳送料額ヲ改定シテ一話
税トシ東京以東以西ノ二種ニ區分シテ其料額ニ
等差ヲ設ク三月和文電報ノ住所氏名ヲ有料トシ其
字数ヲ信文ニ合算スルコトトシ四月海外電報國內
傳送料二種ノ區分ヲ廢シテ之ヲ率トナス五月海外電
報ノ校正ハ料金を收メス局報ヲ以テ之ヲ送受スル
コトトシ十一月和文電報ノ住所氏名ニ信文ト同一
ノ料金を課スルノ制ヲ改メ距離ノ遠近文字ノ多寡
ニ拘ハラズ總テ一定ノ料金を徴シ又和文略名料額
ヲ定ム同十二年五月別使配達料額ヲ一定シ同十三
年四月歐文電報ノ略名料額ヲ定ム同十五年六月嶋
嶼ニ宛タル電報ノ配達料ハ其實費ヲ徴收スルコト
トシ又至急官報ノ料金を通常音信料ノ二倍トス同

十八年五月電信條例ヲ改正スルニ至リ遠近等差料
金ノ制ヲ廢シ全國均一料金を法ヲ創定シ電信切手
ヲ以テ之ヲ納付セシムルコトトス之ヲ電報料金の
一大變革ナリトス現行料金即今是ナリ繼キテ壹岐
對馬ニ係ル特別料額ヲ定メ又取扱規則ニ於テ電報
料額及手数料料額ヲ確定シ住所氏名料ヲ廢スル等料
金ニ關スル大体ノ制度大ニ備ハレリ其九月為替電
報料額ヲ特定ス同二十一年四月電報料及手数料ハ
郵便切手ヲ以テ納メシムルコトト為ス同二十二年
一月試驗ノ為メ東京熱海間ニ公衆ノ電話ヲ開始ス
ルヲ以テ電話料ヲ定メ幾モナク之ヲ廢ス同二十三
年四月壹岐對馬ニ發着スル和文電報料ヲ内地同一
ノ額トシ又電話交換規則ノ制定アリテ東京及横

浜市内ニ電話交換ヲ開始セントスルカ為メ東京市
内電話交換使用料及電話料ヲ定メ裁モナク其使用
料類ヲ改定シ六月横浜市内電話交換使用料及電話
料並東京横浜間電話料ヲ定ム同二十四年四月壹岐
對島ニ發着スル電報料ヲ和歐文ノ別ナク都テ内地
同一ノ類トナシ此ニ於テ始テ全國均一料金ノ良法
ヲ普ク実行スルコトヲ得タリ

第三章 建築

電信ノ建築ハ線路保守並敷地使用ノ便宜ニ依リ道
路又ハ鉄道ニ沿フヲ常トシ民地ヲ使用スルカ如キ
ハ真ニ己ムヲ得サルニ出ツルニ過キサレハ創業ノ
際ニ在リテハ別ニ之ニ對スル法規ヲ設ケス且其建

築法ニ熟達セス之ニ加フルニ民智未タ其利器ヲ識
ルニ及ハラ叩リニ此舉ヲ忌憚シ其利害ノ自己ニ関
スルト否トニ拘ハラス動モスレハ線條ヲ切斷シ或
ハ妨碍ヲ加ヘ其功程ヲ阻害スルモノアリ為メニ訓
諭ヲ發スルコト數回ヲ重ネ久クシテ漸ク其數ヲ減
セリ其手續ハ慣例ニ依リ地方官又ハ郡村吏ヲシテ
其測量ニ立會セシメ私有地ヲ使用シ障害竹木ヲ伐
除スル等該官吏ヲシテ其理由ヲ說示セシメ所有者
ノ承服ヲ待テ施行シ其敷地手當料ノ如キハ明治七
年九月始メテ之ヲ付與スルコト、定メ標準ヲ示シ
地方官ヲシテ便宜分割セシム同八年中電信線路測
量方法ヲ設ケ又電信建築官心得ヲ定メテ其服務心
得ヨリ建築方法ニ至ル迄詳密ニ之ヲ規定シ詔文書

式ヲ設ケ電柱ノ木質伐採時季並方法長短大小ノ度
等ヲ示シ稍々一定ノ順序ヲ立テタリ同十二年一月
江灣河川等ヲ跨カル遠距離ノ地ニ架線スルニ重
鐵枷ヲ用ヒシメ同十七年四月道路改修等ノ為メ電
柱ノ移轉ヲ要スルモノハ其移轉費ヲ支辨セシメ店
頭或ハ門戸ニ當リ商業出入等ニ支障アルモノハ舊
ニ依リ其費用ヲ徵收セシテ之ヲ移轉スルノ制ヲ
立テ同十八年六月大ニ建築官等ヲ集メ其意見ヲ諮
詢シ其贊同ニ基キ電信機施設法ヲ設ク是ニ於テカ
稍々本邦ノ氣候風土ニ適當セル電線建築法ヲ一定
シ同二十一年六月更ニ之ヲ分割シテ電線建築法、電
機裝置法ノ二法トナシタリ其十二月電信線路ニ支
障アル官林樹木伐採手續ヲ定ム同二十二年七月土

地收用法ノ制定アリタルモ該法ニ據リ民地ヲ使用
シ以テ電線ヲ建設セントスルトキハ其使用年限及
方法等支障尠ナカラサルヲ以テ同二十三年八月ニ
至リ遂ニ電信電話線建設條例ノ制定アルニ至レリ
是ニ於テカ始メテ其權利義務ヲ確定シ土地使用手
當ヲ一定シテ定民ノ手数ヲ減スルヲ得タリ

第四章 私設電機

電機ノ私設ハ明治五年九月悉ク之ヲ許可セサルコ
トト内定シハ鐵道ノ用限ニ係アルモノ同七年八月官線
ニ接續スルモノニ限り之ヲ許可スルコトトナシ同
十八年五月電信條例ノ改正ニ依リ其政府專掌ニ屬
スヘキコトヲ明カニシ公線ナキ地ニシテ一人又ハ

兩人ノ用ニ供シ他人ノ電報ヲ送受セサルモノニ限
 リ之ヲ許スノ制ヲ立テ一ル電報及鐵道ノ專用ニ供ス
 コトアルハ并シ一更ニ私設電線規約ヲ設ケ其工事及保
 守ハ電信局ニ於テ之ヲ執行シ費用ヲ支辨セシムル
 事ヨリ電柱敷地ノ處理官私混用線路ノ費用區分私
 線所有者ノ權利義務技術員ノ貸付官私兩線料金ノ
 區分等ヲ規定ス同二十二年三月ニ至リ電信電話線
 私設條規ヲ定メテ工事ノ執行ヲ所願者ノ自由ニ任
 セ公私混架線路ノ保守ヲ所有者ニ委スルコト、改
 メタリ

第三編 事業

第一章 電信

電信ハ明治二年十二月始メテ東京橫濱間ニ架線シ
 同四年八月海外通信ノ關係アルヲ以テ先ツ歩ヲ西
 南ニ向ケ東京長崎線ヲ起工シ同六年二月其工ヲ竣
 ハリ沿道樞要ノ各地ニ開局シ同五年九月更ニ東北
 ニ轉シテ東京青森線ニ着手シ同七年十月ニ至リ竣
 工ス此時ニ當リテ開拓使モ亦政府ニ稟請シテ北海
 道架線ノ工ヲ起シ波島國函館ヨリ後志國小樽ヲ經
 テ石狩國札幌ニ至ルノ線及札幌ヨリ膽振國室蘭ニ
 至ルノ線相繼キテ落成ス是ニ於テカ西南ヨリ東北
 ニ涉リ全國ヲ串通シ本邦電線ノ脊髓先ツ成ル
 同八年三月東京長崎線ヲ延キテ肥後國熊本ニ及ホ

シ同九年七月東京新潟線ヲ起工シ九月岩代國福島
ニ於テ東京青森線ヲ分岐シ羽前國山形ニ及ホシ同
十年三月ニ至リ備前國岡山ヨリ讃岐國丸亀及同國
若松ニ至ルノ架線竣工ス是ニ於テカ全國四大島ヲ
連接スルヲ得テ電線ノ手足稍々備ル
同十年一月名古屋ヨリ東京長崎線ヲ分岐シ伊勢國
津ニ至ルノ架線竣成シ爾後九州各所ニ於テ軍用電
線ト聯帶シテ支線ノ架設スルコト斷十カラス其熊
本ヨリ起リ薩摩國鹿兒島及日向國都城ヲ經テ同國
高鍋ニ至ルノ線ハ十月ニ於テ落成シ豊前國小倉ヨ
リ東京長崎線ヲ分岐シ豊後國大分及日向國延岡ヲ
經テ同國高鍋ニ至ルノ線ハ十一月ニ於テ竣工シ兩
線相連絡シ以テ九州ヲ一環ス十二月岡山高松線ヲ

延長シテ阿波國徳島ニ及ホシ又山陰道線ニ着手シ
周防國山口ニ於テ東京長崎線ヲ分岐シ長門國萩ニ
一線路ヲ開ク十一月六月北陸道線ヲ開カント欲シ
近江國大津ヨリ東京長崎線ヲ分岐シ越前國敦賀同
國福井加賀國金澤越中國魚津ヲ經テ越後ノ國今所
ニ至ルノ線ヲ起工シ九月ニ於テ竣成ス此時ニ當リ
テ九年七月起工スル所ノ東京新潟線モ順次相繼キ
テ起工シ以テ新潟ニ達ス依テ越後國今所ニ於テ北
陸道線ト連接ス是ニ於テ腹背ノ連絡漸ク將ニ備ハ
ラントス
同十一年九月岡山丸亀線ヲ延キ伊豫國今治及同國
松山ヲ經テ土佐國高知ニ一線路ヲ開キ十月羽前國
山形ヨリ羽後國横手ヲ經テ同國秋田ニ延線シ又山

陰道線ヲ石見國濱田ニ及ホス同十二年二月大阪ヨ
リ和泉國堺ニ至ルノ線ヲ紀伊國和歌山ニ延シ又東
京ヨリ下總國千葉及武藏國八王子ヲ經テ甲斐國甲
府ニ架線シ三月伊豫國松山ヨリ同國八幡濱ヲ經テ
同國宇和島ニ延線ス此ニ至リテ南海道線稍々備ハ
ル
同十二年五月山陰道線ヲ繼キ出雲國松江ニ及ホシ
同十三年五月更ニ之ヲ延シ伯耆國米子ヲ經テ因幡
國鳥取ニ達ス及伊勢國津ヨリ同國山田ニ架線シ六
月甲府ヨリ信濃國松本ヲ經テ名古屋ニ連線シ更ニ
之ヲ松本ニ於テ分歧シ信濃國上田ニ達シ以テ東京
新鴻線ニ接續ス同十四年七月新潟ヨリ越後國新發
田ニ至ル線ト羽前國船形ヨリ羽後國酒田ヲ經テ羽

前國鶴岡ニ至ル線ヲ連接ス此ニ於テカ北陸道線相
連絡ス
同十四年九月東京長崎線ヲ播磨國姫路ヨリ分歧シ
但馬國生野ヲ經テ同國豊岡ニ一線路ヲ開キ十月羽
後國秋田ヨリ同國能代ヲ經テ陸奥國弘前ニ架線シ
之ヲ青森弘前線ニ接續ス同十五年六月越前國敦賀
ヨリ若狹國小濱ニ架線シ七月豊岡ヨリ但馬國出石
ヲ經テ丹後國宮津ニ延線シ九月ニ至リ此兩線ヲ連
接シ更ニ豊岡ヨリ山陰道線ノ鳥取ニ了ルモノニ連
絡ス是ニ於テカ本州腹背ノ兩線全ク串通セリ
同十七年十月北海道線ヲ延ヘテ札幌ヨリ膽振國苫
小牧日高國浦賀同國幌泉十勝國大津釧路國釧路同
國厚岸及同國浜中ヲ經テ根室國根室ニ達シ同二十

二年七月更ニ札幌ヨリ石狩國石狩同國厚田同國
益ヲ經テ天塩國増毛ニ架線シ二十三年十月其増毛
線ヲ延長シテ北見國稚内ニ及ホス是ニ至リテ全國
ノ幹線全ク備ハル
此他同十五年中伊勢國山田ヨリ志摩國鳥羽及岩代
國郡山ヨリ磐城國三春ニ架線シ京都ヨリ丹波國園
部及同國福知山ヲ經テ丹後國宮津ニ接續シ同十六
年中播磨國垂水ヨリ東京長崎線ヲ分岐シ淡路國洲
本ニ及ホシ又金沢ヨリ能登國七尾ニ架線シ京都ヨ
リ伏見ニ至ル線ヲ延ヘテ大和國奈良ニ達シ同二十
年中伊勢國津ヨリ伊賀國上野ニ架線シ同二十一年
中備前國岡山ヨリ美作國津山ニ一線路ヲ開キ岐阜
ヨリ関ニ至ル線ヲ延ヘテ飛騨國高山ニ達シ同二十

二年中千葉ヨリ木更津ニ至ルノ線ヲ延ヘテ安房國
館山ニ及ホシ備後國津ノ鄉村ヨリ東京長崎線ヲ分
岐シテ同國福山ニ架線シ同二十四年中北陸道線ヲ
越後國寺泊ニ於テ分岐シ佐渡國相川ニ架線スル等
支線雜出シテ畿内八道八十五箇國中未夕電信線ノ
連絡ヲ見サレノ地ハ河内及隱岐千島琉球ノ四國並
小笠原島五島等ノ數島嶼ノニニシテ是等國島電線
ノ如キモ漸次布設ノ計畫アルヲ以テ全國八十五箇
國及屬島ニ普及スルノ日蓋シ遠キニアラサルヘシ
現時ニ同村々軒軒公衆ノ通信ヲ取扱フ電信官署八
百三十五ニシテ之ヲ細別スレハ郵便電信局三百十
五其支局二十六電信局四十五電信取扱所四十九十
リ又郵便電信局電信局ノ等級ニ依リ之ヲ分ツトキ

八一等四十四局ニ等六十二局三等二百五十四局一
電話器ノ概ニテ一ナリトス而シテ電信線路ハ陸上
線二千八百八十五里二十三所六間五尺水底線二百
十四海里七〇九一ニ及ヒ其線條ノ直長ハ陸上線八
千二百五十里二所二十五間水底線二百七十八海里
四一二九ニ至レリ

第二章 電話

電話ハ明治十年十一月始メテ之ヲ東京横濱間ニ於
テ試ミシニ通信自在ナルヲ以テ十二月ヨリ之ヲ實
用ニ供シ次テ通信閑散ノ諸局及諸官廳用ニ使用シ
大ニ其利便ヲ加フルヲ得タリ爾後當局者ハ東京大
阪等ニ電話交換ヲ創設セシムトヲ企望セシモ費用

支辨ノ道ヲ得サル為メ之ヲ實行スルコト能ハス故
ヲ以テ先ツ東京各官廳ノ間ニ於テ官用ニ供シ其利
便ヲ顯シ以テ一般ニ及ホサント欲シタルモ亦之ヲ
實施スルヲ得ス爾來專ラ之カ試驗ニ力ヲ盡シ益々
機械及線條ノ改良ヲ謀リ同二十一年中東京熱海間
ニ於テ之ヲ試驗シ好果ヲ奏シ更ニ之ヲ静岡ニ延長
シ同二十二年又之ヲ大阪ニ及ホシ試驗セシニ愈々
支障ナキヲ證スルヲ得タリ是ヨリ先之ヲ民業ニ委
セントスルノ議アリタルモ後其不可ナルヲ悟リ同
二十二年ニ及ヒ全然電信條例ノ範圍内ニ於テ政府
之ヲ專掌スヘキコトヲ確認シタリ而シテ必要ノ度
愈々加ハリ又且ツ費用支辨ノ道ヲ得タルヲ以テ同
二十三年十二月遂ニ東京及横濱市内ニ於テ官設電

話交換ヲ開設セリ
 現時二月廿四日在電話器械ヲ以テ公衆ノ電報ヲ送
 受スル電信局ハ三十電話交換ノ媒介ヲナス局ハ二
 電話交換ヲ取扱フ電話所ハ十八ノトス而シテ電
 話線路ハ八十三里三十四所十五間二尺其線條ノ互
 長ハ百二十里十六所四十五間二尺及七電話交換
 線路ハ八十七里三十四所四間一尺其線條ノ互長ハ五
 百二十五里三十四所二十八間一尺及入り

第四編 技術

第一章 修 技

技術ノ教授ハ明治二年神奈川縣修文館ノ生徒四名
 ヲ撰ミ之ヲシテ機械師トギルベルトニ就キ通信
 技術ヲ傳習セシメシニ起リ爾後其需用ノ増加スル
 ニ從ヒ或ハ其縣兵ニ採リ又或ハ衆庶ヨリ擧ケテ之
 ヲ傳習シ又大阪神戸ニ在リテハ數人ヲ撰ミテ先ツ
 之ニ教授シ然ル後更ニ之ヲシテ其他ニ順傳セシム
 ル等便宜之ヲ養成シテ僅ニ其用ニ供セリ然ルニ此
 時ニ當リ用ユル所ノ機械ハ指字器シテ操技太夕容
 易ナリ依リテ皆速ニ其業ヲ卒ハ實業ニ就カシムル
 コトヲ得タリ
 同四年十月英南斯印字機始メテ舶來ス此器タル其

操技ノ巧妙ナルニ隨ヒ益々其效用ノ微妙ヲ顯ハス
ヲ以テ其技術者ヲ養成スルノ困難ナルコト亦曩日
ノ比ニ了ラス是ニ於テカ始メテ修技教場ヲ設ケ生
徒ヲ募集シ之ニ其操技ヲ傳習ス同五年六年ノ間技
術官ヲ英國ニ派遣シ大ニ電氣通信ニ関スル技術ヲ
修メシム而シテ國內ノ電信局數ハ日ヲ逐ヒテ増加
シ其修技生モ亦隨ヒテ卒業スレハ隨ヒテ募集シ事
業ノ擴張ト共ニ順次其數ヲ加ヘ漸ク其養成ニ係ル
各般ノ規定ヲ設クルノ必要ヲ生シ同六年四月電信
技術自費生徒學費取立方並ニ其入學願及保證人ノ
文例ヲ定メ以テ應募者ノ意向ヲ確メ入學者ノ去就
ヲ牽制ス七月ニ於テ入學試験手續ヲ定メ年齡十二三
歳乃至二十歳ノ者ヲ募集シ生徒ノ等級ヲ區分シ學

費ノ給典書籍物品ノ貸付及退學者學費辨償法等ヲ
規定ス八月ニ至リ修技學校ヲ東京朝留ニ開キ其分
校ヲ大阪高麗橋電信局内ニ設ケ同七年九月修技科
條例ヲ設ケ修技學校ニ関スル細大ノ方法規程ヲ立
テ十月入學試験手續ヲ改正シ應募者ノ年齡ヲ十五
歳以上二十五歳以下トシ試験科目ヲ定メ生徒ヲ上
下二級各級三等ニ分テ學費ヲ給スル差アリ是ヨリ
先キ生徒ノ教授ヲ術學ノ二科ニ分テ術科ハ印字指
字單鉞ノ三機ヲ以テシ學科ハ英佛西語ヲ以テス南
後年ヲ逐ヒテ規則章程ヲ更革シ漸ク其歩ヲ進メ同
十三年四月ニ於テ更ニ少年生ヲ增置シ其應募年齡
ヲ十三歳以上十五歳以下トシ修業期ヲ通常生ニ二
倍シ主トシテ讀書ヲ授ケ傍ラ技術ヲ修メシム十一

月電機通信技術方取扱規則ヲ改定シ入學試験ノ科目ヲ増加シ自費通學ノ期ヲ短縮シ少年生ヲ修技生見習ト稱シ其學費ヲ省減シ又卒業生ノ分局在勤非職在校ノ制限ヲ解キ各自ノ請求ヲ以テ任所ヲ定ムルコトヲ廢シ及師省ヲ制限ス同十四年一月其業ヲ卒業者ニ卒業證書ヲ授與スルコトトシ同十五年中應募者僅少ニシテ其需用ヲ充タス能ハサルニ依リ各地方ニ就キテ便宜之ヲ募集スルノ便法ヲ開キ大阪電氣通信生徒各地募集取扱規則ヲ設ケテ其手續ヲ示ス同十七年五月通信技術ノ非職ヲ休職ト改メ月俸ノ三分ノ二以下ヲ給スルコトトス又日本鐵道會社所屬通信生徒養成ノ囑托アリシヲ以テ其教育手續ヲ定メテ之ヲ養成ス十月日本鐵道會社囑托

生徒ニシテ歐文ノ送受ヲ善クスル者ニハ卒業證書ヲ與フルコトトス十一月通信技術ニシテ二十歳未滿ノトキヨリ奉職スルモノハ其二十歳未滿ノ勤續年數ヲ恩給年限ニ通算スルヲ得セシム是レ通信技術ハ二十歳未滿ヲ以テ該技術ヲ練習スルニ適當ノ年齢トシ之ヲ採用シ而シテ奉職年數ヲ一般官吏ト等シク丁年以上ニアラサレハ之ヲ通算セサルハ穩當ナラストシタルニ由ル又修技生學術ノ優劣ニ依リ其卒業ヲ二等ニ分ツコトトス同十九年二月東京大阪本支兩學校ニ校務教授ノ二掛ヲ置キ四月ニ至リテ東京電信修技學校官制ヲ制定シ其校長ヲ奏任トス五月東京本校ヲシテ大阪分校ヲ管理セシメ六月電信局長ヲシテ電信修技學校ヲ監督セシ

△同二十年五月電信修技學校ヲ廢シ更ニ東京電信
學校ヲ置ク修技學校創設以來此時ニ至ルマテ別ニ
專任學校長ヲ置カス乃チ明治五年六月寮中ニ修技
課ヲ置キ同六年四月之ヲ技術課中ノ修技科トナシ
同十年一月本寮ヲ廢シ局ヲ置クノ際之ヲ修技掛ト
ナシ同十五年十二月又之ヲ修技科トナス等ノ變遷
ニ隨ヒ課長又ハ科掛長等ノ職ニ在ルモノ直ニ校長
ノ職ニ當レリ而シテ名義上ヨリ之ヲ觀ルトキハ課
又ハ科掛ト學校トハ全ク異別ナルモ實際ハ之ニ反
シ其課又ハ科掛中只夕修技課ト稱セシ時通辨ノ一
項ヲ加ヘタルコトアルモ其他ハ皆學校ノ事務ヲ除
キ別ニ管掌スルモノナク之ト學校トハ即チ異名同
物ニシテ其教官亦其課掛等ノ屬及技手等ヲ以テ之

ニ充テタリ同十九年四月官制制定ノ後ニ至リ未夕
別ニ校長ノ命ヲ受ケタルモノ乏ラズ幹事ヲ以テ
其職ヲ執ラシメタリ
同二十年五月東京電信學校官制ヲ制定スルニ及ヒ
テ校長幹事教授等ハ皆之ヲ奏任トシ其學科ハ獨リ
通信技術ニ止マラス電機電池及線路ノ試験ヨリ建
築ニ関スル技術ニ至ルマテ總テ電信ニ屬スル學術
ヲ教授シ以テ大ニ學校ノ地位程度ヲ高尚ニシ校長
以下各其官ヲ擇シ規模大ニ備ハレリ乃チ規則ヲ改
定シ少年生及級外生ヲ廢シ在學期ヲ二箇年トシ學
年學期ノ期限ヲ定メ其入學期ヲ每學年ノ初トシ其
試験科目ニ算術ヲ加ヘ學費ノ名稱ヲ寄宿料ト改メ
每級ノ等差ヲ廢シ其額ヲ一定シタル等更革スル所

亦斯ナカラストス又電信技術見習生ヲ設ケ其取扱規則ヲ定ム見習生ハ各管理局長ニ於テ其須要ニ應シ臨時之ヲ募集シ便宜ノ電信局ヲシテ音信送受ノ技術ヲ傳習セシム同二十三年三月ニ至リ郵便事務ニ従事スル職員モ亦之ヲ養成スルノ必要アリトシ遂ニ東京電信學校ヲ廢シ更ニ東京郵便電信學校ヲ置キ其官制ヲ制定ス是ニ於テカ純然電信主務局長ノ管理ヲ離レ獨立シテ通信大臣ニ直隸スルコトトナレリ故ニ爾後ノ沿革ハ之ヲ該校ニ讓レリ此際東京電信學校ノ生徒ヲ東京郵便電信學校ニ引継キシ者八十六名タリ四年修技教場ヲ閉キシヨリ應募者ノ總數千九百六十四人平均一人一課百内退校セシ者三百五十一名平均一人一課死亡セシ者三十六名平均一人一課ニシ

テ其間卒業セシ者實ニ千四百八十九名ナリ之ヲ五年ヨリ二十二年ニ至ル十八箇年ニ平均スレハ一年八十三人弱ナリトス

第二章 製 機

電信機械ハ明治初年創業ノ際ニ在リテハ多ク之ヲ外國ノ輸入ニ仰キ同四年八月以來倉庫課ニ於テ之ヲ買辦蓄藏セシカ同六年四月技術課中ニ製機掛ヲ置キ始メテ機械ノ製造ニ着手シ大ニ良果ヲ得テ續々製造シ傍ヲ其附属器具ヲ製出シテ以テ實用ニ供セリ同十年一月寮ヲ廢シ局ヲ置クニ際シ倉庫係中ニ隸屬セシカ同十一年六月更ニ電話機ノ製造ニ着手スル等其事業漸ク擴張スルヲ以テ不便斯ナカラズ依リテ同十一年九月製機掛ヲ置キ大ニ力ヲ其改

造ニ致シ益々機械ノ善良ニシテ且完備セシコトヲ
計レリ同十四年一月鍛鉄工場ヲ新築シ三月同所ニ
於テ製造セシ各種ノ通信機械並附屬諸器等數十種
ヲ第二回内國勸業博覽會ニ出品シテ有效一等賞ヲ
得同十七年十二月米國ルイジアナ州ニウオルレヤ
ンス府ニ於テ開ク所ノ工業博覽會ニ出品シテ又一
等賞ヲ得同十八年五月英國倫敦ニ於テ開設セル發
明品博覽會ニ出品シテ名譽賞ヲ得ル等其改良スル
所尠ナカラズ逐次進歩ノ實效ヲ顯シタリ

第五編 理財

電信ノ理財ハ官制及制度ノ沿革ニ伴隨シテ屢々變
更シ其實跡ニ就テ之ヲ推究スルニ大約三大變遷ヲ
歴テ以テ今日ニ至レリ

明治二年ヨリ同四年ニ至ルノ間ハ事業ノ創始ニ係
リ未タ一定ノ方鍼テ立テス只臨機ノ措置ニ出ツ之
ヲ要スルニ試験ノ施為タルニ過キス殊ニ會計ノ如
キハ其簿冊半ハ祝融ノ災ニ罹リ會々一ニノ不完全
ナルモノアルモ廣ク之ヲ諸書ニ照考スルノ途ナシ
同五年ニ及ヒテ工部省ノ規模稍々整ヒ事業ノ經理
始メテ秩序ヲ履ムニ至リ其會計モ亦隨ヒテ收支ノ
顛末ヲ明ニスルコトナレリ之ヲ第一變遷トス同
十七年七月作業條例ノ發布ニ會シ該法ニ基キ入ル

ヲ收メテ直千ニ出ルヲ支ヘ尚ホ餘剩アレハ既往ノ
興業費ヲ償還スルノ資トナシ其新興業費ハ別ニ國
庫ノ支出ニ仰ク等大ニ經理ノ方法ヲ整革セリ之ヲ
第二變遷トス降テ逋信省創置ノ後即チ同十九年度
ヨリ作業經濟ニ據ルノ制ヲ廢シ其支出ハ一般國費
ト同シク經費ノ支辨ニ歸シ收入ハ總テ國庫ニ納付
スルノ順序トナレリ之ヲ第三變遷トス此數次ノ變
遷アリタルト二年ヨリ四年ニ至ル間精覈ノ調査ヲ
為ス能ハサルトニ依リ創業ヨリ今日ニ至リ其首尾
ヲ貫通シテ電信ニ關スル純正ノ收支ヲ明示スルコ
ト能ハスト雖其收支ノ對照上大ニ推衡ヲ失スルノ
偏倚ナク漸次收入ヲ以テ既往ノ支出ヲ償還シ作業
經濟ノ末期即チ明治十八年度ニ於テ電信ニ關スル

集合財産ノ價格ヲ積算セシモノニ依ルニ實ニ三百
九十四万四千三百六十三圓三拾五錢八厘郵部省保
ニシテ之ヲ當時電信事業上國庫ニ對スル負債即チ
既往興業費中未タ償還シ盡サ、ル金額二百二十万
千百六拾二圓二拾三錢ニ比スレハ其金額ヲ還了シ
テ尚ホ百七拾四萬三千二百一圓拾二錢八厘ノ餘贏
アリ爾後ニ在リテハ會計法ノ變更セシテ以テ別ニ
收支對照ノ精算ヲ為サスト雖其方法順序ハ愈々整
理ノ實ヲ顯ハセリ

第六編 海外電信

第一章 萬國聯合

本邦ノ萬國電信條約ニ加盟セシハ實ニ明治十二年
即チ千八百七十八年ニ在リテ露京會議ノ後英京會
議ノ前年ナリ是ヨリ先キ伊露兩京ノ會議ニ向ヒテ
モ共ニ理事官ヲ派シテ之ニ參同セシメシト雖只其
席ニ列シテ議事ヲ傍聽スルニ止マリ同十年英京會
議開設ノ報ニ接スルヤ當時我邦電信ノ業稍々整ヒ
明年ヲ待テ本業ノ式ヲ擧ケ將ニ我電信官署ヲシ
テ海外電報ノ送受ヲ執行セシメントスルノ期ニ達
シタルヲ以テ宜シク其聯合條約ニ加盟シ委員ヲ派
シテ會議ニ參與セシムヘシトノ議起リ遂ニ同十一
年三月ニ至リ露國政府ニ依リテ萬國電信條約ニ加

盟セシコトヲ通シ同十二年一月十九日加盟調印ノ
事ヲ了ス又同十一年四月電信局長芳川顯正ヲ擧ケ
テ英國倫敦電信會議委員トナシ同國ニ派遣ス既ニ
發ス開會延期ノ報ニ接シ中途ニシテ歸朝セリ翌十
二年四月芳川電信局長參會ノ為メ英國ニ赴ク六月
十日英國倫敦ニ於テ萬國電信會議ヲ開設ス此會ニ
於テ議決セシ重要ノ條件ハ稅則ノ改正即チ每語稅
法ノ創設及歐洲全般課稅法ノ一定ニシテ之ニ次ク
モノヲ秘辭數字及機杼語用法ノ規定等ナリトス起
ヘテ同十三年一月芳川電信局長歸朝ス乃チ倫敦ニ
於テ議定セシ所ノ條款ニ對シ我政府ノ批准ヲ得テ
之ヲ英國政府ニ報ス其十月海外ニ發スル電報ノ信
文ニ我邦語ヲ用ユルコトヲ許ス是亦該會議ノ成績

ニ由ル同十八年四月電信局長石井忠亮ヲ伯林萬國
電信會議委員トナシ獨逸國ニ派遣ス其八月十日開
會ス此會ヤ我委員石井忠亮モ亦擧ケラレテ稅則委
員ノ列ニ加ハル殊ニ前會ニ於テハ會議ニ臨ミ僅ニ
意見ヲ陳ヘタルニ過キサリシカ今回ニ至リテハ本
邦ヨリ數條ノ改正案ヲ提出シ大ニ好結果ヲ得タリ
而シテ此會議ニ於テ議決セシ重要ノ條件ハ一般電
報料ノ低減及萬國電話條款ノ創定ナリトス降リテ
同二十三年三月外信局長栗野慎一郎ヲ萬國電信會
議委員トナシ佛國ニ派遣ス五月十六日佛京巴里ニ
於テ開會ス此會ニ於テモ亦本邦提議スル所ノ改正
案斷カラサリキ而シテ此會議ニ於テ議定セシ重要
ノ條件ハ為替電報ニ關スル條款ノ新設電報書法ノ

改良等ナリ以上ヲ萬國電信會議參同ノ概況トス
又海底電信線保護萬國聯合會議ハ明治十五年十月
十六日佛京巴里ニ於テ始メテ之ヲ開ク是ヨリ先キ
佛國政府ハ該會議ノ為メ我政府ヨリモ委員ヲ派遣
セシコトヲ要求ス其期日太夕通ルヲ以テ我在佛國
公使館員ヲフレデリック・マルシヤルニ以テ其委
員トナシ之ニ參加セシム同十六年十月十六日復夕
佛京巴里ニ於テ第二回海底電信線保護萬國聯合會
議ヲ開ク依リテ再ヒコマルシヤルニ委員トナシ
之ニ會同セシメ同十七年一月佛國特命全權公使蜂
須賀茂韶ニ付スルニ巴里議決ノ海底電信線保護萬國
聯合條約ニ記名調印スルノ全權ヲ以テス是レ此條
約ニ加盟スルハ國際上必要ニシテ且我亦裨益アル

ニ由ル同十八年七月該條約書及罰則ヲ公布ス同十
九年五月十二日第三回海底電信線保護萬國聯合會
議ヲ佛京巴里ニ開ク依リテ復夕コマルシヤルニ
委員トシテ之ニ參與セシム同二十年十二月其條約
説明書ヲ頒布シテ其意義ヲ明ニシ同二十一年五月
一日ヨリ之ヲ實施セリ

第二章 大北部電信會社

海底電信線ヲ所有スル電信會社ニシテ本邦ニ直接
ノ關係ヲ有スルモノハ大北部電信會社ニシテ明治
三年八月二十五日之ニ上海長崎間及浦塩斯德長崎
間ノ西海底線ヲ長崎ニ陸揚シ及長崎横浜間ニ海底
線ヲ布設スル事ヲ許可シ丁抹國公使ト之ニ關スル

條約ヲ交換ス其十月ニ於テ該會社ハ長崎ノ地形ヲ
實測セシニ其港口電線ノ沈布ニ適セサルヲ以テ近
傍便宜ノ地ニ陸揚シ長崎ニ連接センコトヲ懇請ス
其請洵ニ已ヲ得サルニ出ルヲ以テ同四年二月遂ニ
之ヲ許シ肥前國千本ノ地ニ陸揚セシム幾モ十ク上
海長崎間及浦塩斯德長崎間兩線其工ヲ竣ハリ海外
通信ヲ開始ス然ルニ長崎横濱間海底線布設ノ許可
ハ我邦ニ於テ彼ノ海底線布設ニ先テ陸線ヲ増架シ
益々海外通信ニ利便ヲ加ヘタルニ依リ該會社其沈
布ノ起工遷延セリ是ヨリ先キ海外電報ハ都テ該會
社ニ委託シテ之ヲ取扱ハシメシモ同十一年三月本
邦電信開業ノ式ヲ舉クルニ方リ其委託ヲ解キ我電
信官署ヲシテ直ニ之ヲ送受セシム依テ其料金分收

法等ノ如キハ数次ノ協議ヲ遂ケ改正スル所多ク漸
ク緒ニ就クニ至レリ同十五年ニ至リ該會社ト長崎
上海間及長崎浦塩斯德間海底線ノ増架並日本朝鮮
間海底線新設ノ約ヲ成シ長崎横濱間海底線布設ノ
許可ヲ廢ス同十六年三月朝鮮國ト日朝間海底線沈
設ニ関スル條約ヲ締結ス是ニ於テ我電信局長及
該會社技長等壹岐對馬ノ二島及朝鮮國釜山ニ歷航
シ以テ其海線陸揚ノ地ヲ相シ且海底ヲ測量シ沈線
ノ位置ヲ撰定シ壹岐國郷ノ浦對馬國嚴原朝鮮國釜
山ノ三所ニ我電信局ヲ設置スルノ目的ヲ以テ海底
線ハ該會社其陸線ハ本邦ニ於テ分擔布設セリ同十
七年日朝間電報ニシテ該會社線ヲ經過スルモノノ
料金ヲ定メ同十九年料金分收率ヲ變更スル等幾多

ノ変革ヲ経同二十二年ニ至リ壹岐對馬發着電報料
及長崎釜山經過萬國電信料低減ノ議ヲ起シ殊ニ壹
岐對馬ニ發着スル電報料ハ遂ニ同二十三年四月以
降歐文電報ヲ除キ内國普通ノ料金ニ依リ之ヲ傳送
セシム

抑モ從前ハ我國內ニ在リテ独リ壹岐對馬ノ二島ニ
限り其料金特ニ高額ニシテ全國均一料金ノ制度ニ
戻リシモ是ニ至リテ始メテ歐文電報ヲ除ク外國內
同一ノ制ニ依ラシムルヲ得タリ然リ而シテ今後内
國電報料ヲ輕減セントスルトキハ再ヒ其均準ヲ失
フノ不便アルヲ免カルルコト能ハス況ンヤ歐文電
報ニ至リテハ尚其料額ヲ等一ニスル能ハサルニ於
テヤ實ニ我國ノ主權ヲ傷フモノト謂ハサルヲ得

ス是ニ於テ同二十三年中肥前國呼子ヨリ壹岐國郷
ノ浦ヲ經テ對馬國嚴原ニ到ル該會社海底線ヲ買收
スルノ議ヲ發シ越ヘテ同二十四年四月一日迄ニ之
ヲ本邦ニ買收シ了リタリ

電信各種總計累年一覽表

年次種別	局所數	線路里程	線路里程	電報發信數	電報料
明治二年	二	八ノ八 ^里 ノ八 ^町 五 ^町 四 ^町	八ノ八 ^里 ノ八 ^町 五 ^町 四 ^町	1通	1圓
同三年	四	一八ノ二 ^里 ノ一 ^町 四 ^町	一八ノ二 ^里 ノ一 ^町 四 ^町	1	1
同四年	四	一八ノ二 ^里 ノ一 ^町 四 ^町	一八ノ二 ^里 ノ一 ^町 四 ^町	一九四八	三六八八 ^圓 一 ^圓 三

備考

- 一本表中線路及線路里程ハ通信省所轄ニ係ル分ノミヲ掲ク
- 一電報發信數及電報料ハ總テ内外ヲ合計シタルモノナリ

電信各種總計累年一覽表

年次種別	局所數	線路里程	線條里程	電報發信數	電報料
明治二年	二	八里八分五厘	八里八分五厘	1	1
同三年	四	一八里二分四厘	一八里二分四厘	1	1
同四年	四	一八里二分四厘	一八里二分四厘	一、四四八	二、八六八
同五年	一八	一五九里七分八厘	一八里二分四厘	八、六三九	一、〇二五
同六年	二八	三五三、二六、〇七	五三六、一四、二二	一八六、四四八	五、〇七七
同七年	三四	四三三、二九、〇二	一、三二五、〇〇、二二	三五六、五三九	一、一四、五六、〇七
同八年	四七	六三六、二〇、二二	一、五九、〇九、五	五二五、九三〇	一、五九、一九〇
同九年	五一	六七、二、〇四	一、六二五、二、二九	六九、一、六二	一、八七、八、二
同十年	六八	九四七、〇、一	一、八四六、〇、九	八六八、九七〇	三、一、三、五三
同十一年	九七	一、三、〇、〇、四、〇	二、八二八、〇、五、〇	一、〇、三、七、四、三	三、六、一、七、三
同十二年	一二二	一、五、〇、七、二、〇、五	三、二、〇、〇、三、〇、〇	一、六、五、二、〇、五	五、六、四、〇、〇
同十三年	一五五	一、七、五、一、一、四、一、五	四、〇、二、六、〇、五、七	二、〇、〇、四、一、九、三	七、一、六、二、三
同十四年	一六九	一、八、七、一、一、一、二	四、六、六、五、〇、三	二、五、三、七、三、三	八、七、一、七、〇
同十五年	一八五	一、九、九、一、一、一、一	五、一、五、〇、二、一、五	二、九、二、八、二、四	九、七、四、三、四
同十六年	一九五	二、〇、五、六、一、二、二	五、四、九、九、一、八	三、六、二、四、〇、二	八、六、三、〇、八
同十七年	二一二	二、二、一、六、一、四、三	五、八、〇、一、三、四、五	四、一、七、七、三、三	九、七、八、〇、三
同十八年	二一五	二、三、四、三、三、一、二	六、九、二、〇、二、二	五、一、四、三、五、七	一〇、六、九、一、〇
同十九年	二二七	二、四、六、五、四、〇、二	七、四、七、〇、五、八	六、四、八、〇、三、五	一一、五、六、二、五
同二十年	二二六	二、三、四、五、三、一、四	六、二、〇、八、二、三、四	二、五、六、四、五、一	七、二、三、〇、六
同二十一年	二五〇	二、四、五、一、三、九、〇	六、七、三、二、二、八	二、七、六、七、三、三	七、三、七、八、四
同二十二年	二九九	二、五、七、〇、二、九、一	七、〇、〇、一、八、二、八	三、三、〇、六、六、一	八、五、九、九、四
同二十三年	三四二	二、八、一、二、二、五、四	七、八、九、二、九、二	四、一、三、七、一、六	一〇、三、二、八、七
同二十四年	四三五	三、〇、七、三、〇、三、九	八、五、〇、四、〇、二	四、四、五、八、〇	一、〇、九、六、九

備考

一 本表中線路及線條里程ハ通信省所轄ニ係ル分ノミヲ掲ク
 一 電報發信數及電報料ハ總テ内外ヲ合計シタルモノナリ

電信各種比較表

種別	一市二村スル		一市二村スル		一市二村スル		一市二村スル		一市二村スル		一市二村スル		一市二村スル	
	戸数	人口	戸数	人口	面積	技術者	電報通数	電報通数	電報通数	電報通数	電報通数	電報通数	電報通数	電報通数
東京	15,700	2,282,897	1,447,148	1,447,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
京都	6,900	883,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
大阪	3,400	4,430,912	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
神奈川	1,600	1,187,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
兵庫	5,300	2,417,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
長崎	1,400	2,667,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
新潟	4,100	2,667,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
埼玉	4,700	2,667,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
千葉	4,100	2,667,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
茨城	2,000	2,667,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
群馬	1,500	2,667,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
山梨	1,100	2,667,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
静岡	1,800	2,667,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
愛知	3,900	2,667,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
三重	2,600	2,667,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
奈良	2,100	2,667,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
和歌山	1,200	2,667,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
徳島	1,600	2,667,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
香川	2,400	2,667,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
愛媛	2,000	2,667,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
高知	1,100	2,667,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
福岡	2,700	2,667,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
佐賀	1,400	2,667,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
熊本	1,300	2,667,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
鹿嶋	1,200	2,667,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
北九州	1,100	2,667,000	2,047,148	2,047,148	5,993	1,200	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338	6,338
合計	147	147,000	147,000	147,000	147,000	147,000	147,000	147,000	147,000	147,000	147,000	147,000	147,000	147,000

備考

一 市村数並面積は明治二十一年十二月三十一日調査依り之を對し而數も亦其年現在依り

一 戸數並人口は明治二十二年一月三十一日現在に依り之を對し而數も亦其年現在依り

一 電報通數は其年終數に依り之を對し而數も亦其年現在依り

一 技術者人口は其年終數に依り之を對し而數も亦其年現在依り

一 電報通數は其年終數に依り之を對し而數も亦其年現在依り

局及電報人口累年比較表

年次	種別	一局對スル人口	内國電報			一局對スル電報數	
			内國私報	外國私報	發信	著信	
明治四年		八二七七〇大	〇・五九		四八六二		
同五年		一八五〇三	〇・三〇		四四八〇		
同六年		一三〇〇、九一七	〇・五五		六、六五九		
同七年		九九九、九二五	一・〇三		一〇、四八六		
同八年		七三〇、六〇四	一・五二		一〇、一九〇		
同九年					一三、五三三	一三、六六五	
同十年					一三、七七九	一三、二六二	
同十一年		三六八、七四八	二・八二		一〇、六九五	一、四八六	
同十二年		三三〇、七九五	四・五六	四・〇一	一四、七五〇	一五、八〇六	
同十三年		二三四、五七四	五・五六	四・九四	一三、九三〇	一四、〇九二	
同十四年		二一七、一六〇	六・六八	六・三〇	一五、〇一四	一五、七〇〇	
同十五年		二〇〇、〇九四	七・八七	七・二〇	一五、八二八	一六、五三九	
同十六年		一九二、〇六〇	九・五五	六・二九	一三、四五七	一四、一四九	
同十七年		一七八、六二七	七・〇二	六・二九	一二、六二九	一三、四〇〇	
同十八年		一七七、四四八	六・八八	六・〇六	一二、一五九	一二、九六五	
同十九年		一七七、四五二	六・七七	五・四七	一一、四三〇	一二、四八六	
同二十年		一七二、八七五	六・四七	五・六七	一一、三四八	一二、四五六	
同二十一年		一五九、七〇七	六・八八	六・一六	一一、一五九	一一、八六三	
同二十二年		一三二、七五三	八・三三	七・二〇	一一、〇九二	一一、六三三	
同二十三年		九二、九九六	一〇・一〇	九・一七	九、五一三	九、八五八	
同二十四年				六・二四	一〇、二四八	一〇、六五〇	
平均		八七一、五六〇	五・三三	六・二四	〇・〇六一	一三、〇三二	

備考

- 一局ニ對スル人口ハ毎年未日現在ノ局所數ヲ以テ同日調査ニ係ル人口ヲ除シタルモノトス
- 一箇年人口百ニ對スル發信數ノ中内國電報ト了ルハ和歐支ヲ合シタルモノ一局ニ對スル電報數ノ發信及著信ハ内外和歐支ヲ合算シタルモノニ依リ算出セリ
- 一本表中空欄アルハ九年十年ノ人口調査ナキハ十一年以前ハ官私報ヲ區別スル能ハサルト七年以前ノ著信電報數不明ナルト二十四年ノ人口ノ調査未夕完結セサルトニ由ル

料金通数人口信語数累年比較表

年次	内國		外國		内國		外國		内國		外國	
	通	對	通	對	通	對	通	對	通	對	通	對
明治四年	248	117	11	1	109	1	1	1	1	1	1	1
五年	257	121	11	1	111	1	1	1	1	1	1	1
六年	273	125	11	1	115	1	1	1	1	1	1	1
七年	286	131	11	1	121	1	1	1	1	1	1	1
八年	294	134	11	1	125	1	1	1	1	1	1	1
九年	295	135	11	1	126	1	1	1	1	1	1	1
十年	308	141	11	1	131	1	1	1	1	1	1	1
十一年	318	144	11	1	135	1	1	1	1	1	1	1
十二年	321	146	11	1	138	1	1	1	1	1	1	1
十三年	322	147	11	1	140	1	1	1	1	1	1	1
十四年	323	148	11	1	141	1	1	1	1	1	1	1
十五年	318	147	11	1	140	1	1	1	1	1	1	1
十六年	314	146	11	1	139	1	1	1	1	1	1	1
十七年	312	145	11	1	138	1	1	1	1	1	1	1
十八年	290	148	11	1	137	1	1	1	1	1	1	1
十九年	270	147	11	1	136	1	1	1	1	1	1	1
二十年	260	144	11	1	135	1	1	1	1	1	1	1
二十一年	244	143	11	1	134	1	1	1	1	1	1	1
二十二年	239	141	11	1	133	1	1	1	1	1	1	1
二十三年	232	140	11	1	132	1	1	1	1	1	1	1
二十四年	228	139	11	1	131	1	1	1	1	1	1	1
平均	274	133	11	1	137	1	1	1	1	1	1	1

備考

- 一 通ニ對スル電報料ハ有料電報通数ヲ以テ電報料金ヲ除シ得タル所ノ数ナリ
- 一 人口百ニ對スル電報料ハ毎年末日調査ニ係ル人口ヲ百分シ之ヲ以テ電報料金ヲ除シ得タル所ノ数ナリ
- 一 通ニ對スル信數又ハ語數ハ發信又ハ著信電報總通数ヲ以テ發信又ハ著信電報總信數又ハ總語數ヲ除シ得タル所ノ数ナリ
- 一 本表中空欄アルハ九年以前ノ信數、語數及外國電報料金額不明ナルト九年十年ノ人口調査ナキト二十四年ノ人口ノ調査未タ完結セリルトニ由ル

シロA4

終